

学会ニュース

..... 第56号 2008年1月

目次

・ 第30回大会について	1
・ 国際18世紀学会執行委員会報告	2
・ 第12回国際18世紀学会に参加して		
— 感傷旅行気味の報告 —	鷺見洋一	3
・ 国際18世紀学会日韓合同ラウンドテーブル	長尾伸一	8
・ 熱い「啓蒙談論」・・・人文学は健在だった	チョンミン	9
・ 東京大学駒場博物館 特別展		
「Musica ex Machina—機械じかけの音楽」について	鈴木裕子	11
・ 事務局より	14

第30回大会について

本年度の大会は、2007年6月21日（土）、22日（日）に、大分大学（旦野原（だんのほら）キャンパス）で開かれることが決定いたしました。開催校責任者は、松田聡会員です。詳細は5月半ばにお届けする予定の大会プログラムでご案内申し上げます。今回の大会では下記の共通論題や自由論題の他にも大分関係の小特集なども企画中です。どうかふるってご参加下さい。

共通論題：「18世紀オペラへの学際的アプローチ」（コーディネーターおよび司会は松田聡会員、原則として6月22日を当てる予定です）。

自由論題公募：（原則として6月21日を当てる予定です）

第30回大会で発表を希望される方は、1000字以内の発表要旨（なるべくテキストファイル形式あるいは「ワード」ないし「一太郎」形式のフロッピーディスクとハードコピーの両方）を付けて、3月18日（火）までに学会事務局までお申し込みください（メールでも結構です）。発表者の待ち時間は1時間、うち報告が40分、質疑が20分を予定しておりますが、申込者が多数の場合には、待ち時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野間のバランスなどを勘案して、常任幹事会で調整ないし選考させていただきますので、その点、あらかじめご了承下さいようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっております。詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

国際18世紀学会執行委員会報告

国際18世紀学会の第12回大会が2007年7月8日（日）から7月13日（金）までフランスのモンペリエで開催され、その期間中、執行委員会2回と総会が開催されました。日本18世紀学会からは寺田元一幹事が代議員として、また増田真幹事が国際執行委員会委員として参加いたしました。議事録（抄）につきましては日本18世紀学会HPをご覧ください。ここではとりわけ重要な次の二点のみご報告いたします。

1) 2007-11年期執行委員会の選挙が行われ、その結果がモンド会長より発表されました。当選者は以下のとおりです。

会長	キース・マイケル・ベーカー Keith Michael Baker (米、397票)
第1副会長	アンドルー・カーペンター Andrew Carpenter (アイルランド、249票)
第2副会長	ジャン＝クロード・ボネ Jean-Claude Bonnet (フランス、339票) ハンス＝ユルゲン・リュウゼブリンク Hans-Jürgen Lüsebrink (独、270票)
書記長	リーズ・アンドリエス Lise Andries (フランス、368票)
書記補佐	ヴォルフガング・アダム Wolfgang Adam (ドイツ、365票)
会計	マリア・グラツィア・ボッタロ・パルンボ Maria Grazia Bottaro Palumbo (イタリア、241票)
会計補佐	エチエンヌ・オフマン Étienne Hoffmann (スイス、211票)
執行委員	ロレンツォ・ビアンキ Lorenzo Bianchi (イタリア、233票) アンナ・グルツェスコヴィアク＝クルヴァヴィツ Anna Grzeskowiak-Krwawicz (ポーランド、222票) マーク・レッドベリー Mark Ledbury (イギリス、247票) フロランス・ロトリー Florence Lotterie (フランス、243票) アンヌ＝マリー・マイ Anne-Marie Mai (デンマーク、233票) フリッツ・ナーゲル Fritz Nagel (スイス、255票) フランク・オゴアマン Frank O' Gorman (イギリス、217票) 寺田元一 (日本、245票)

2) 2011年の大会はオーストリアのグラーツで開催されることが決まりました。

第12回国際18世紀学会に参加して — 感傷旅行気味の報告 —

鷲見 洋一(中部大学)

モンペリエ

南仏モンペリエは懐かしい留学地である。私は40年前、ここの文学部(ポール・ヴァレリー大学)に1967年から1972年まで、フランス政府給費留学生として滞在した。その時の指導教授ジャック・プルス先生は残念ながらつい3年前に逝去され、今では鉄道駅の裏手にあるプロテスタント墓地に眠っておられるが、恩師不在とはいえ、思い出が一杯に詰まった街で国際18世紀学会が開催される偶然はやはり嬉しかったし、嫌でも少しばかりの感傷を伴う滞在にならざるをえない。従って、この報告もその気分を反映し、学術的報告とはやや趣を異にするきらいがあるが、予めお許し下さい。

国際18世紀学会

わが日本18世紀学会もその傘下に収まる国際18世紀学会は、4年に1回、大会を開催する習わしである。必ずオリンピックの前年という取り合わせも面白いが、私が参加してきたのは、ミュンスター(1995年)、ダブリン(1999年)で、前回のロスアンジェルス大会(2003年)は戦争が始まったため参加を見合わせた。フランスでの開催は、1971年のナンシー大会以来のことである。

街の発展

モンペリエは中心街が丘の上にあり、古代フェニキア人が香辛料を荷下ろしする港だったことから、「香辛料の山」*Mont des épices* と呼ばれ、それが訛って現在の呼称に繋がるとする説がある。香辛料の医療効果が注目され、そこから医学部が生まれ、モンペリエ大学が1289年に創設された。ルネッサンス期には大作家ラブレーが在籍したことで知られる。啓蒙期の痕跡を今なお留める都市で、とりわけ旧市街には、今でも18世紀の城館が多く建ち並び、専門のガイドブックも売られている。

私が滞在した頃のモンペリエは、そうした過去の記憶や遺産に寄りかかった「よき古い街」であり、映画館数館、ボーリング場1軒という、まことに侘びしい田舎の大学町だった。それが、ここ数十年における発展で、経済的にも文化的にも、すっかり面目を一新したのである。交通機関と言えばバスしかなかったのが、いつしか洒落たデザインのトラムウェイが走る。旧市街の名所としては、最古の医学部、数々の庭園、遊歩道、水道橋やフェアブル美術館など枚挙に暇ない。そこに今回の会場になった巨大な国際会議場がいつの間にか出現した。オペラハウスまで擁するこの近代的な建物は、式典、一般講演から分科会、デモ、宴会など、大きな学会に不可欠なすべての機能を兼備しており、しかも会場が街の中心にあるので、数分であらゆるスポットにアクセスできるのが強みである。

大会の構成

今回のモンペリエ大会の共通主題は「科学、技術、文化」で、啓蒙期に医師ボルドーなどの活

躍で知れた「モンペリエ学派」の衣鉢を継ぐかのような、伝統と革新とが併存する無難な共通テーマが掲げられた。7月8日(日)夜に歓迎のレセプションがあり、翌9日(月)から13日(金)までの5日間、9時から18時までの一日が4つの「セッション」に分割された。初日の9日(月)は、午前中一杯を使って開会式、2つの講演が行われ、午後から半日に2回ずつのリズムで、通し番号付きの「セッション」(1時間半ずつ)が金曜日午後まで、計15回開催される。すべての報告、ワークショップ、ラウンドテーブルはこのセッションのどれかに割り振られることになる。ほかに木曜日の午前一杯を費やして、総括講演と総会が予定され、最終日の13日(金)に最後を締めくくる4つ目の総括講演があって、閉会式となる。なお、夜の部としては、初日9日(月)に20時からアペリチフ・パーティが、11日(木)20時半から夕食会が開催された。会期中は信じられないほどの快晴に恵まれ、法学部に籍を置いていた若き大詩人ポール・ヴァレリーを魅惑した青空が、殆ど途切れることなく私たちを優しく見守っていた。以下、日録式に一週間の滞在を記すことにする。

7月7日(土)

成田空港から青山学院大学の井田尚氏と一緒に、席も隣り合わせ。パリ経由モンペリエ空港に20時過ぎに到着。機中ではお互い無駄口をきかず、ひたすら報告のための原稿執筆に励んだ。国際研究集会への申し込みは簡単だが、日本にいる間は多忙で、発表原稿さえ思うように書けない。12時間のフライトは、その点、電話もメールもない、理想的な書斎を提供してくれる。ホテルに宿泊する井田氏と別れ、懐かしい街路を次々に抜けて、サン・テロワにある故ジャック・ブルースト邸に到着。未亡人のマリアンヌの出迎えを受ける。何度となく足を運んで、論文指導を受けた思い出の家である。1階のゲストルームを貰い、3階のアパルトマンに上がって、ヴェランダで遅い簡単な夕食。23時過ぎに階下へ。荷物を解き、疲れを覚えたのでシャワーを浴びずに就寝。

7月8日(日)

休息日。日中は階下で仕事をしたり、街で人と会ったり。19時、3階に上がって、パリからブルースト邸に到着したナンテール大学の親友、レカ・ツィオミス女史と再会。話が弾む。夕食。早めに引き上げて、寝室で2時半まで明日のための準備。

7月9日(月)

9時前に出て、会場に行き、まずチェックインをし、大会のデザインの入ったオレンジ色の鞆を貰う。開会式が始まっている。休憩時間にあらかたの知り合いと出会う。中川久定夫妻、寺田元一、増田真、その他外国人の旧友多数。本来は故ジャック・ブルーストが担当するはずだったフランス代表によるフランス語の総括講演は、トゥール大学のジャン＝マリ・グルモが「公衆の啓蒙回帰と18世紀研究」と題し、いつもの調子で、シニカルな、挑発的弁舌。やや大向こうの受け狙い気味のスピーチだった。私は大いに笑ったが、評判が毀誉褒貶相半ばするのは当然。

13時近くから、会場下のプラスリーで日本人だけの昼。徳永聡子、玉田敦子、佐藤淳二、阿尾安泰、井田尚、小関武史、等。結構美味しいスズキを食べる。直後にラウンドテーブルがあるので、小生だけはワインを固辞。先に出て、14時半前に会場に入る。

当地には、故ジャック・ブルースト教授を所長としていた18世紀研究所があり、その重鎮で今回の国際大会の事実上の最高責任者にあたるクロード・ロリオル教授から数ヶ月前にメール

があり、本来であれば地元を代表する筈だった大御所プルースト教授を追悼する集会を、嘗ての教え子として開催してくれないかという依頼を受けた。それが、初日の午後一杯、ラウンド・テーブル2回分の時間を貰って組まれた「Ici et ailleurs 此方と彼方」である。プルースト教授の最後の弟子、ミュリエル・ブロと私とで共同司会という手筈が、間際になってブロが椎間板ヘルニアで倒れ、私一人で休憩を挟んだ3時間を仕切るという結果になった。

寺田元一、ジョルジュ・ベンレカッサ、レカ＝ツイオミスの堂々たる報告の後、ポール・ヴァレリー大学副学長で、プルーストの教え子でもあるドミニク・トリエールが、最晩年のプルーストに行なった数時間に及ぶインタビューの一部を、カセット・テープで聴かせてくれた。

ここで休憩。後半は聴衆が少し減ったが、ゲルハルト・シュテンガー、ベアトリス・フィンク、最後が小生による報告。加えて、1986年にプルースト氏が来日の際、NHKテレビに出演した「Jacques Proust parle」と題する番組のDVDを見せる。インタビューアーは国立音楽大学の清水康子氏だった。前半のカセット、最後のDVDはやはりインパクトがある。静かな感動の漲る集会で、単独司会はしんどかったが、やってよかったと思う。

中川久定さん夫妻を囲んで、中心部のコメディ広場に面した若者の多いレストランで夕食。さすがに疲れたので早寝。

7月10日(火)

午後のラウンド・テーブルが大仕事なので、午前の名古屋グループによる報告会は失礼することにし、準備に集中する。原稿をかなり書いて、目鼻が整ってきた。朝食を挟み、11時頃まで仕事をする。私が司会ということで申し込んだラウンド・テーブル「Sur l'importance des métadonnées de l'*Encyclopédie* — 『百科全書』メタデータの重要性」である。

14時半開始。環境の良い小部屋を貰えて幸運だった。初めは日本人の聴衆しかおらず、どうなることかと思ったが、やがて、レカ＝ツイオミス、イレヌ・パスロン、アラン・チェルヌスキ、アルベルタン＝コッポラといった、現在の『百科全書』研究を支える一線級の研究者が次々に現れて、熱っぽい雰囲気になった。私が劈頭にPPTを使って企画の全容を説明。次いで一橋大の小関武史氏が『百科全書』と中国について、逸見龍生氏が『百科全書』の項目「魂」について、それぞれ精緻な研究を披露。しんがりの徳永聡子氏は見事な英国英語によるPPT付きの発表で、英国貴重書の活字に関わる先端研究の成果を報告して、『百科全書』のデジタル解析のための布石となる基本要綱を提示した。最後に逸見氏が、フリッパーなるソフトを使ったプレゼンをやって、私たちの「メタデータ抽出企画」の視覚的なデモで満場を唸らせた。質問は沢山来た。レカ＝ツイオミスのいかにも女親分といった長いコメント。パスロン、コッポラ、アンドリュウ・ブラウンなど。総じて好意的な受け止めで、感触は上々である。終わって、一言も発しなかったローザンヌ大学のアラン・チェルヌスキがやって来る。珍しく昂奮の面持ちで、「質問がありすぎて、かえって手を上がられなかった。明日でも会えないか」と言うので、昼と一緒に食べながら話そうと言うことに。ここまで反響があると、嬉しいと共に、少し恐ろしくもなってくる。

夜は私の発案で、目下モンペリエで最高という評価のレストラン *Jardin des sens* を予め予約して、ぞろぞろ行くことになる。メンバーは小関武史、逸見龍生、玉田敦子、佐藤淳二、井田尚、徳永聡子、鷺見の7名。少し前までミシュランで3つ星を貰っていた名店だけに、和やかな至福の刻を過ごした。私としては、昨日と今日で、2つの大きなラウンドテーブルを無事にこなした安心感も手伝い、若い研究者に囲まれて、大いに飲み、食べたことは申すまでもない。

7月11日(水)

午後に帰る同宿のレカ＝ツィオミスと最後の朝食。昼にアラン・チェルヌスキと会うと言ったら、彼女も来るといふ。11時から、中部大学の玉田敦子氏の報告を聴く。彼女の指導教授ミシェル・ドロンがいる。構成のしっかりした報告で、好感を持たれたようだ。終わって、アラン・チェルヌスキ、レカ＝ツィオミス、マリアヌス・プルースト、逸見龍生、小関武史、小生で階下のブラスリーに行き、テーブルを囲む。アランが異常に熱心で、我々が提議した16のメタデータについて、しつこく質問してくる。レカもサポートしてくれ、盛り上がった。やはり昨日のラウンドテーブルのインパクトは大きかったようだ。

別れて、玉田、井田、小関、逸見、徳永の日本人若手5名をセートに案内する。どうしても見せたい港町である。鉄道駅からナルボンヌ行きに乗って20分。駅を降りて、えんえんと運河沿いに歩く。恐いほどに澄み切った青空。やっと海までたどり着いたところで、急坂を一気に登ると、もうそこが「海辺の墓地」だ。おぼろげな記憶を頼りに、お目当てのヴァレリーの墓をやっと探し当てる。地中海を背景に写真を撮る。帰りは同じ道を引き返して、途中のカフェで白ワインを1本。

モンペリエに着くと、20時半から、会場最上階でディナー・パーティーが待っていた。向かって左側でアペリティフ、右側でテーブル式の食事。水田洋、珠枝夫妻、長尾伸一、高橋博巳、といった名古屋組と同席。食事はまあまあだったが、サービスの遅さが記録的で、帰宅は1時半だったという。私は途中から、連日蓄積の疲労でまどろみ始め、これはいかんとデザートを待たずに中座。早めに帰って就寝。

7月12日(木)

この日は午後から、演劇祭で賑わう隣町のアヴィニョンに行き、フランス国営FM放送の「フランス・キュルチュール」に出演というハプニング。この騒ぎで、学会の方は完全に欠席ということになった。ヨーロッパ啓蒙について、3名の外国人研究者の話を書くという趣向で、アメリカ代表がロバート・ダーントン、ポーランドのテレサ・コストキエヴィシュゾヴァ、アジアの小生が選ばれたのだった。国際18世紀学会会長でボルドー大学のゲルマニスト、ジャン・モンド教授が同道する。どんな番組で、何を訊かれるかなど、まるで五里霧中のプロジェクトであり、不安半分、演劇祭の雑踏でウロウロする楽しみ半分といった気分で出かけた。ロバート・ダーントンは、慶應義塾大学の故海保眞夫会員と私の共訳で、20年前に『猫の大虐殺』を岩波書店から出版した経緯があり、たまたまこの大会前に第3版を出すという話が出ていたので、ためらわず序文をお願いして快諾を得た。本番は18時半から正味1時間。建物の中庭に急拵えの舞台があり、ゲスト3名がそこでマイクを囲む。周囲に数十名の聴衆がいる。番組はジャン・ルブランという人気司会者の独壇場で、土日を除く毎日やっており、構成は綿密に練られているが、唯一舞台のゲストだけが何も知らずに血祭りにあげられるという趣向である。一切予習が出来ない。これが番組の本当の姿だった。見れば、小生ばかりでなく、ダーントンもテレサもなにがしかメモを用意しているが、何の役にも立たなかったことになる。緊張もしたが、笑って、喋って、楽しい1時間だった。

帰りの車中ではダーントンを質問攻めにして、例のニューシャテル古文書館での世紀の資料発見や、ベルリンでの「壁の上の最後のダンス」などについて、興味深い話を次々に聞き出した。モンペリエに着いて、皆で食事をして解散。

7月13日（金）

逸見、小関両氏と、駅の向こう側にあるプロテスタント墓地を目指す。言わずと知れたジャック・ブルースト先生の墓参りだ。その後、会場に行き、逸見、小関両氏はイレヌ・パスロン主宰の電子化問題を取り上げている部屋へ。私は日本人4名の企画したラウンドテーブル「Etatisation et solitude 国家規制と孤独」の部屋に行く。司会の佐藤淳二氏の巧みな弁舌による司会で、佐藤氏、増田真氏、辻部大介氏、阿尾安泰氏と進んだが、いずれも充実した内容で感心した。議論もあり、最後は佐藤淳二氏と増田真氏との間で、長い議論があるなど、日本人同士が外国で外国語のディスカッションをするスリリングな展開となり、日本のルソー研究のレベルの高さと、実力の向上ぶりを見せつけた。

慌ただしい昼食をすませると、玉田敦子氏と2人でファーブル美術館訪問。夕方からダントンの総括講演があるので、小一時間、早足で中世から18世紀までを見る。フランスの地方最大というこの美術館の特徴は、品揃えが豊富だが、平均点の高い無難な絵ばかりで、これという決め球はない。だから日本に持ってくるのはかなり無理だろう。ただ、美術史の勉強がじっくり出来る有り難い教室だ。

ダントンの講演会場は予想通り超満員で、別室にテレビ中継がされるほどの盛況。「Le diable dans bénitier — l'art de la diffamation 悪あがき：誹謗術」と題して、英語と仏語を交互に使いながら、結局、2カ国語で講演。驚くべきパフォーマンスで大喝采を浴びた。昨日のアヴィニョンといい、今日の講演といい、ダントンは容姿、談話、発想、人柄に、凡百の研究者にない、ハリウッド・スターのようなカリスマ性と魅力があり、彼がいるところ、常に人垣が幾重も出来て、誰かとにこやかに話しているというイメージしかない人である。

20時、劇場横のレストランに、中川夫妻と寺田氏とでマリアンヌ・ブルースト夫人を招待。おのずと同窓会のような雰囲気になり、私の感傷旅行を締め括るに相応しい、しつとりと感動的な宵になった。

今回のモンペリエ学会は、そういうわけで、自分の準備が不十分だったり、墓参りや放送出演があったりで、ごく限られた報告や催事にしか接することが出来ず、レポートとしてはかなり偏った内容になってしまったが、国際学会への参加というものには、大なり小なりそういう我が儘で手前勝手な側面がつきもので、ご寛容を切にお願いする次第である。

国際 18 世紀学会日韓合同ラウンドテーブル

長尾伸一(名古屋大学)

夏の陽差しの下、約一週間にわたって南フランスの古都モンペリエで開かれた国際 18 世紀学会大会の 3 日目にあたる 2007 年 10 月 7 日、2 回目の日韓合同ラウンドテーブルが開催された。日本 18 世紀学会はこの数年間、韓国 18 世紀学会との交流を続けている。2002 年札幌大会でのシンポジウム「東アジアと啓蒙」への韓国学会からの報告者招聘から始まったこの試みは、双方の熱意に促されて、韓国学会大会への日本側報告者の派遣から、4 年前の国際学会ロサンゼルス大会での日韓合同セッション「啓蒙と東アジア」開催へと展開してきた。それ以後は名古屋地区のメンバーによる科研費助成研究「東アジアと啓蒙」(研究代表:高橋博巳)が開始され、その資金によって日韓共同研究会が組織されて、今回の共同ラウンドテーブルの開催に至っている。

あらかじめテーマを決めて関心のある研究者を募る国際共同研究とは違い、学会間交流の実のある継続は思いのほか難しい。始めるのは比較的やさしいが、儀礼的なものに終わる可能性がある。また日本研究者が少ない日本の学会、西洋研究者が参加しなくなっている韓国の学会のそれぞれの事情もあり、絞り込んだ共同研究の問題設定も容易でない。そのためこの日韓交流では両学会が国際 18 世紀学会の一種の地域部会であることを生かし、国際的な 18 世紀研究でもあまり省みられていない東アジアの 18 世紀を取り上げ、同時代の西洋と比較検討することを考えてきた。専門研究のテーマとしては漠然として物足りないところがあるが、両国のアジア、西洋研究者の双方が参加し、それぞれの専門領域を踏まえながら討議できる幅広い枠組みとしては、当面これ以外には考えにくい。また今回の大会はジャック・プルーストが活動したモンペリエで開かれたが、ここでも東アジアを主題としたセッションはほとんどなかった。このような現状もあり、今後も国際学会を舞台にこの試みを続けていく意味はあると思われる。幸い両学会、とくに韓国学会会員の意欲に後押しされる形で、今まで討議の場を国際大会で 2 回設けることができた。

4 年前のロサンゼルス大会では 4 名が報告するセッションを日韓両学会で開催したが、今回はラウンドテーブルの形で、報告枠を拡大するため 2 部構成とした。そのため第 1 部が朝 9 時から 10 時半、第 2 部が 11 時から 12 時半と合計 3 時間、計 10 人が報告し、出席者を交えて議論を行った。韓国からは昨年の広島大会で報告した金会長を含む 6 名が報告した。日本からは水田洋、高橋博巳、金沢美知子、クレール・フォヴェルグ会員が基調講演者および報告者として参加し、筆者が司会を務めた。韓国学会については、朝鮮王朝文化の研究者から西洋文学研究者まで分野も幅広く、世代的にもさまざまな人々が参加した。ラウンドテーブルのタイトルと、それぞれの報告者、報告内容は以下の通りである。

ラウンドテーブル第一部:

The Enlightenment and East Asia Part 1: The Presence of East Asia in 18th Century Europe and European Studies in Korea and Japan in the 21st Century

Moderator : Shinichi Nagao

Participants :

Hiroshi Mizuta: Opening speech, 18th century studies from East Asian perspective

Claire FAUVERGUE: Diderot's philosophical views about Asia

Michiko Kanazawa: 18th century Russia in Japanese scholarship
Chunghee KIM: Negotiations of Desire in Sterne's 'A Sentimental Journey'
Hi Kyung MOON: An Enlightened Cosmopolitanism and Globalization

ラウンドテーブル第二部:

The Enlightenment and East Asia Part 2: The Age of the Enlightenment in East Asian Contexts

Moderator : Shinichi Nagao

Participants :

Kwon Jong YOO: Human Mind and the Principle of Cultural Construction: A Comparative Study of Asian and European Understandings of the Human Mind in the 18th Century

Daehoe Ahn: Literary travel writings of 18th-century Chosun

Seunghye CHUNG: Korean Language Education in Japan in the 18th Century: the Case of Amenomori Hoshu

Min JUNG: Encyclopaedic Writing in 18th-Century Chosun

Hiromi Takahashi: A Republic of Letters in East Asia

ラウンドテーブルの様相については、ラウンドテーブル翌日に朝鮮日報に掲載されたチョンさんの報告記事を日本語で要約して紹介しておく。また学会年報に掲載される予定の高橋、水田両会員の報告記事も見ていただきたいが、2回の国際大会での試行を経て、相互の意見交換や共通する土台についての交流はほぼ完了したと思われる。その中から18世紀両国の儒学に関する新しい認識も生まれつつある。同時代としての西洋と東アジアの比較はまだ端緒にすぎたばかりだが、興味深い成果が予感される。今後は中国学会との交流も含め、東アジアでの地域シンポジウムから地域国際学会開催へと交流を実質化しつつ、国際学会に成果を提示できる方向へ内容的にも深めていくことが望ましい。個人的には、帝国主義の時代以前、まだ平和的な文化交流の時代だった東アジアの18世紀を研究することが、この地域での未来の国際交流への示唆として役立つことを期待している。

熱い「啓蒙談論」・・・人文学は健在だった

モンペリエにて チョン・ミン(漢陽大学)

要約:加藤理沙(名古屋大学)

11時間超のフライトと3時間30分TGVに乗って、やっとフランスの地中海沿岸都市モンペリエに到着する。中世都市に入ったような古風な雰囲気！1289年に開校したモンペリエ大学をはじめとする3つの大学で9日に開会した国際18世紀学会は、14日まで6日間続けられる。世界30余カ国から来た1000名を超える18世紀研究者たちは、4年に1回ずつ集まって大会を開き、今年で12回目だ。論文発表者だけでも700余名、150個を超える発表および討論が開かれる途

途中で、23 個のテーマ別ワークショップと特別講演が開かれる。

もの凄い規模も規模だが、テーマの細部までよく見ると、学海無辺という言葉を実感する。ワークショップと分科討論のテーマは、「18 世紀の古典修辞学」、「18 世紀の時間認識の変化」、「好奇心の航海」、「18 世紀の性と近代性」、「科学共和国」、「18 世紀の身体と疾病」等々、多様な分野、幅広い領域をカバーする。このような 150 余個のテーマごとに 4~5 名の発表者が待機している。今後 1 週間、広がる知性の饗宴が、計り知れない興奮を沸き起こす。

韓国 18 世紀学会は 1995 年に設立され、1999 年には世界学会に正式支会として加入した。2003 年アメリカ UCLA で開催された 11 回大会で、日韓両国が共同セッションを初めて持ったことがきっかけになり、今回の大会では 2 つに拡大して「啓蒙と東アジア」を共同テーマに、全部で 7 名の韓国 18 世紀学者と 3 名の日本の学者が参加している。国学側からは筆者とアン・デフェ、チョン・スンヘ教授が参加し、西洋学はキム・ジョンヒ、ムン・ヒギョン、イ・ヨンモク教授が、哲学はユ・クオンジョン教授が発表者として出た。このほかにも医学史専攻のイ・ジョンチャン教授と在外の日韓の学者たちが多数参加している。

少なくともここでは、人文学の危機の症候など見つけられない。発表者と発表テーマを記した案内冊子はおよそ 200 ページに達する。各自関心のあるテーマを探して、市内の中心にある大会議場と数十個の小会議室を忙しく行き来する。昨日は歓迎カクテルパーティーが開かれ、今日は数百名が参席した中央開会式と碩学講座が午前からずっと続けられた。その熱気が異邦人の人見知りをもっと解いてくれる。

中央ホールには、過去 4 年間の世界で達成された、18 世紀関連研究成果を盛り込んだ単行本数百冊が展示されている。私たちも 18 世紀学会で刊行した「偉大な 100 年 18 世紀」と筆者の「18 世紀朝鮮知識人の発見」、アン教授の「朝鮮のプロフェッショナル」などの冊子を簡単な説明と一緒に主催側に伝えた。好奇心に駆られて冊子の図版を見つめる視線が新鮮だ。

日韓 18 世紀学会が共同で準備したセッション発表は、10 日午前午後に分けて開かれた。西洋の学者たちに、東洋で似た時期に起こった非常にそっくりな現象はどのように受け止められるだろうか？少なくとも 18 世紀に起こった変化は、相互の影響関係を検討する暇もなく同時的現象として起こった。東アジアの啓蒙談論を彼らにも十分に伝えなければならない必要と覚悟を、改めて思い知った。

4 年前にもそうだった。「井の中の蛙だったなあ・・・」、私たちの学問の世界化までの道のりはまだ遠い。脈絡を読み取る眼も力なく、民族の自尊のみを叫ぶ現実、外から見るとさらにうんざりする。500 年前、ノストラダムスが学生の身分でぶらついていたキャンパスを今日私が歩いた。ゴッホの絵によく登場する、近くのアレル地方のアトリエも 1 日ほど訪ねてみるつもりだ。印象派と野獣派の絵画を作り出したこの熱い日差しは、ワインの香りのように甘くて夢幻的だ。その日差しの中で、もう 1 回生まれ変わった気になった。

東京大学駒場博物館 特別展
「Musica ex Machina—機械じかけの音楽」について

鈴木裕子(東京大学)

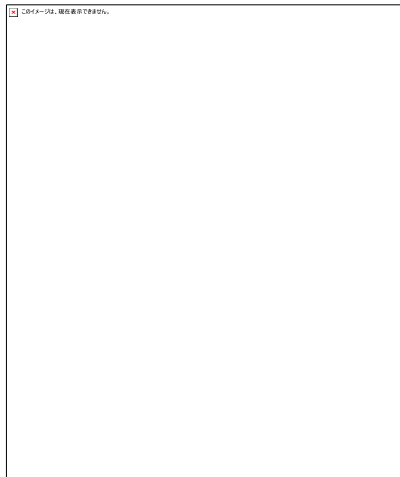
2007年10月20日開催の、東京大学駒場博物館の特別展「機械じかけの音楽」が12月2日に終了しました。この展覧会は、日本学術振興会科学研究費補助金による「音楽文化における機械の役割—その歴史・現状に関する多面的分析と展望」研究グループ（研究代表者：ヘルマン・ゴチェフスキ東京大学准教授）による研究プロジェクトの一環として企画されたものです。この展覧会は大きく二つの部門からなっており、一つは研究発表の部門で、展覧会のテーマに関する歴史的系譜の解説展示（1階）と、新たな自動作曲・自動伴奏プログラムの発表（2階）、そしてもう一つは、ベルリン在住のイギリス人アーティスト、マーティン・リッチズ氏（Martin Riches, 1942-）の作品展示（1階）の部門です。

順路に沿って行くと、1階では最初に、機械と音楽が一体どのような関係において歴史の中で結びついてきたのか、その系譜がパネル解説と展示物を用いて紹介されました。天球が音楽を奏でる機械のようなものとして表象される古代の宇宙観、宇宙の調和的な運行が機械によって表現される、神学的世界観の象徴としての中世の天文時計、宇宙の調和の象徴としてのキルヒャーの自動音楽機械、18世紀には、神学的象徴としてだけではなく、いわば世俗的な音楽と機械の関係性が見出され、そして20世紀のヒンデミットの自動ピアノのための作曲のような、新たな表現の追求を可能とする機械音楽へとつながっていく、歴史的変遷が追える展示となっていました。

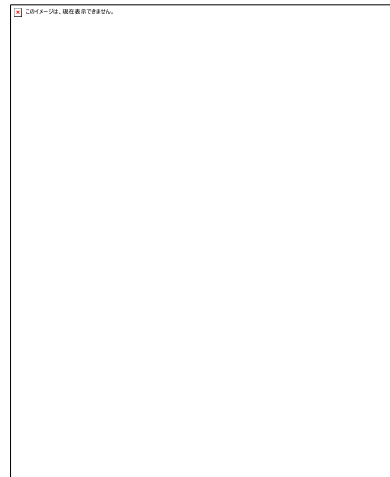
ここでは18世紀のコーナーについて少し紹介してみたいと思います（※この18世紀コーナーの解説パネルと展示は、お声をかけて頂いた執筆者が主に担当させて頂きました）。先に世俗化の傾向が見られるという言い方をしましたが、具体的にはパリの修道士アングラメル『トノテクニー』（1775年）、『オルガン製作技巧』への寄稿（1778年）を取り上げ、キルヒャーのような宇宙の象徴としてではない、優れたオルガン奏者の演奏を記録保存するためのツールとしての自動オルガンを紹介しました。さらにこのコーナーでは、アングラメルが当時の高名なオルガン奏者バルバトルの協力を得て、自ら考案したシリンダー記譜法に基づき、バルバトル作曲《ロマンス》の正確な音価を記録した譜表を元データとして、厳密にコンピューター・シミュレーションされ、音声ファイルとして聴けるコーナーも設けられました。これは、現代のような録音再生機器のなかった18世紀後期のバルバトルの演奏の「復元」であり、時代考証的にも非常に重要な試みといえます。一方で、機械が人間の姿をとる場合は、また違った問題が見出されます。つまりヴォーカンソン制作「フルート奏者」（1738年）の位置付けの問題で、これは自動オルガンと同じくシリンダーの仕組みを用いて、自動人形が実際にフルート演奏をする自動機械ですが、まさに機械論的自然観に基づく解剖学と音響学研究の結晶であり、18世紀においても自動機械と音楽の多様な関係性が見出されるのです。

歴史的系譜の展示コーナーを過ぎると、今回の展覧会の目玉でもあるリッチズ氏の作品展示のコーナーとなっていて、中でも「フルート・プレイング・マシン（Flute Playing Machine）」と「セリネット（Serinette）」は、実際にフルートやオルガンを機械仕掛けで演奏するもので、今回の展覧会のテーマにダイレクトに関連するものとして非常に興味深いものでした。リッチズ氏による大学院生向けのワークショップでは、機械と音楽の関係の歴史に関するスライド形式での講義が行なわれ、こうした歴史の系譜に自分自身を位置付けながら、新たな作品を生み出してい

ることが分かりました。この二つの作品のタイトルが想起させるとおり、彼はやはり、ヴォーカンソンの「フルート奏者」やアングラメルの『トノテクニー』などを既に検討したうえで、こうした新たな造形をつくり出しているのです。



Martin Riches: Flute Playing Machine Photo: Hermann Kiessling



Martin Riches: Serinette Photo: Roman März

例えばヴォーカンソンの「フルート奏者」では、18世紀当時の通常の形態に近いフルートが用いられたと思われませんが、リッチズ氏は「フルート・プレイング・マシン」には通常のフルートは用いず、水平に設置された金属管の筒の上下に、力学的計算に基づいて歌口と指穴の位置を決めており、つまり人間が演奏できない特殊な形状のフルートを用いていました。そしてソフトにはヴォーカンソンはシリンダーを用いていましたが、リッチズ氏は透明フィルムを用います。フルートに空気を送る信号の位置と、音階の信号の位置を油性ペンで塗ると、フィルムがローラーで巻き取られていく際にそこだけ光が遮断されるため、それが信号として読み取られ、指定した音の長さや音程でフルートが奏でられるという仕組みです。

この作品自体は、「フルート奏者」のように人間のかたちを模してはおらず、また機械のメカニズムを覆い隠すこともなく、むき出しの機械そのものの造形です。すると一見、完全に機能に特化した、如何にも人間離れした機械装置のように思われます。しかし、先述のとおりソフトとなるのは透明なフィルムですが、油性ペンで手書きで信号の位置を塗っていかなくてはならないうえ、機械にフィルムをセットした後も、フィルムはただシンプルにローラーで巻き上げられていくので、巻き上げられたフィルムは手で受け取れないと床にどんどん落ちていってしまいます。すべてをオートメーション化していない部分を残しているあたり、手がかかることで機械に妙に親しみが湧いてきてしまうのであり、実はそこまで作品の狙いとして含まれていたのではないかと思われました。

それは「セリネット」にも見出されます。まずリッチズ氏の「セリネット」は、アングラメルの『トノテクニー』を踏まえた上で制作されていることは先述のとおりで、重要な点は、アングラメルはシリンダーに代わるソフトとして「盤 (table)」のアイデアを述べていたのですが、リッチズ氏はまさにこの「盤」をソフトとして活用しているのです。当時アングラメルは「盤」の可能性（記録できる演奏時間に制限があるシリンダーに比べ、盤は幾らでも継ぎ足し可能であり長く演奏することができる、など）に触れるに留まっていたので、リッチズ氏の作品は時代考証としても重要であるといえるでしょう。アングラメルはおそらく縦長の板の表面に金属のピンを打ち込んでいくことを想像していたと思われませんが、リッチズ氏は黒色のプラスチック製の板に、カッターで切り取った白いピースを貼り付けていくという手法を採っています。黒い板に白

いピースがよく映えるので、視覚的な鑑賞としても楽しめ、このソフト自体も作品足りうるのです。そしてこちらも、ソフトである長い「盤」を両手で支えて装置にセットし、手回しハンドルを回すのに従い、「盤」は反対側にどんどん繰り出され、やがて床に落ちてしまうので、他の人に受け取ってもらわなくてはならず、自然とコミュニケーションが生まれてくるところも魅力の一つと感じられました。

2 階では新たに開発されたソフトが発表され、人がピアノの鍵盤で少し演奏すると、その調性を読み取って自動的に作曲しながら演奏していく自動演奏ピアノや、人の鍵盤の演奏のスピードに合わせて伴奏をしてくれる自動伴奏システム、日本語の文章を入力すると、その音韻を読み取って自動歌唱と自動伴奏するシステムなどが展示され、それぞれ来館者が実際に体験することができました。また、自動作曲システムの先駆けとして、19 世紀のヴィンケルの「コンポーニウム」が紹介され、コンピューター・シミュレーションによる試聴が可能となっていました。ここではまさに最先端の機械と音楽の関係を体験することができ、人間の代理としての自動機械の役割を越えた、機械にしかできない新たな音楽的表現の追求の一端を垣間見ることができたといえるでしょう。

今回の展覧会は、博物館での展示以外にも、様々なイベントが催されました。10 月 31 日の自動ピアノ演奏会、リッチズ氏による大学院生を対象としたワークショップ、12 月 1 日、2 日に開催された国際シンポジウムなどです。このシンポジウムでは、様々な分野の研究者による、機械と音楽をテーマとした非常に多岐にわたる内容の発表を聴くことができました。一例を挙げると、機械が宇宙の調和や神学的世界観の一つの象徴であり、音楽、哲学、機械が総体として知識の普遍的秩序の中に組み込まれていた 18 世紀以前 (ex. ライプツィヒ大学セバスティアン・クロツツ氏) と、機械が具体的な目的を果たすための道具となり、純粋な精神性を求めながら、機械を用いてそれに到達しようとする 19 世紀以降 (ex. 京都大学岡田暁生氏) をつなぐものとして、機械観の大きな転換点としての 18 世紀の位置付けを検討する必要性が説かれました。実際、18 世紀における機械と音楽の関係性を問う研究自体は非常に少ないのが現状といえるでしょう。

例えば、象徴的な要素に満ちたキルヒャーの自動音楽機械のような文献は、18 世紀には確かにあまり見当たりません。では 18 世紀に機械と音楽の関係が完全に世俗化したかということ、またそう簡単には言えないところもあります。例えばアングラメルは、優れたオルガン奏者の演奏を機械に記録して後世に残そうとする目的の一方で、教会の典礼という厳粛な場においては、間違いをおこす下手なオルガニストより、たとえ同じ演奏を繰り返すにしても常に正確不変な機械による演奏の方がよいのではないかと提案しています。つまり、機械と音楽の関係に世俗化傾向が見られる一方で、完全には神学的契機とも切り離されていないところも、18 世紀における機械と音楽の興味深い一側面といえるのではないのでしょうか。ただこうした機械の考案は非常に具体的で実用を目指している点は、それ以前の機械との大きな違いといえるでしょう。

先述のとおり、18 世紀におけるこうしたテーマの研究は非常に少ないといえます。例えばアングラメルに関しては、そこに当時の演奏法を読み解く研究論文や、自動演奏楽器の歴史に位置付ける著作がいくつかあります。しかし例えば、音楽を機械で演奏させることそのものの思想的背景やその意味を問う研究はあまり見当たりませんが、そのなかでもモーツァルトの天才性と機械のアナロジーに関する論文 (Annette Richards, "Automatic genius", *Music & Letters*, Vol. 80, 1999, pp.366-389) は非常に興味深く、この分野の研究の先鞭を付けてくれるものと思われます。

18 世紀における機械と音楽の研究は、つまり全くないわけではなく、むしろ分散しているというほうが正確かもしれません。例えばヴォーカンソンの「フルート奏者」、メルリンの「自動演奏

記録装置付チェンバロ」、アングラメルの著作などは、それぞれが研究対象として既に取り上げられています。その分散しているテーマの中に、「機械と音楽」という大きな主軸を据えることで、18世紀という時代を読み解く新たな視点を得ることができるのではないのでしょうか。今後の18世紀研究に多くの示唆を与えてくれた点でも、興味の尽きない展覧会であったといえるでしょう。
(展覧会 HP : <http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/2007>)

事務局より

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、本年度までの会費未納入の方へ振り込み用紙を同封させていただきます。別紙でもお知らせしておりますが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では、学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。

寄贈図書

ポルトガル18世紀学会より次の本が寄贈されましたので、広く会員の方々にご利用いただけるように京都大学文学研究科の図書館に収めました。

Maria Helena Carvalho dos Santos (ed.),

Nas fronteiras da tolerância. Actas. Colóquio Internacional e Pluridisciplinar 16, 17 e 18 de maio de 2005. Instituto de Estudos Portugueses Faculdade de Ciências Sociais e Humanas-UNL.,

Lisboa, SPESXVIII, 2005, 358 p.

ISBN: 972-99503-9-3

幹事会メンバー：

安西信一（常任幹事、年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、岩佐愛（常任幹事、年報・書評担当）、王寺賢太、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事、会計担当）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、小穴晶子（常任幹事、年報・業績欄担当）、高橋博巳（東アジア交流担当）、寺田元一、長尾伸一、中山智子、馬場朗（常任幹事、庶務・学会ニュース担当）、堀田誠三、増田真（国際幹事）

会計監査：中島ひかる、濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第56号 2008年1月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室内

e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp

fax: 03-5841-8958

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsecs/>